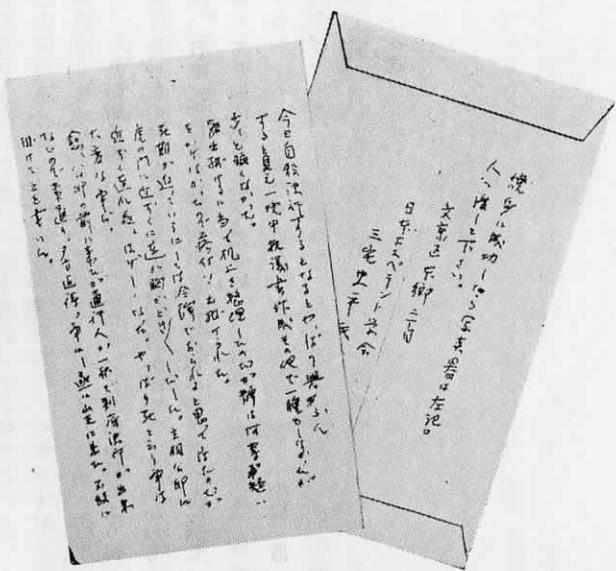


- 15 高杉一郎訳『嵐のなかのささやき』一九五四年 新評論社。
- 16 白井吉見編『現代教養全集 わが生涯』一九五九年 筑摩書房。
- 17 遠山茂樹「生きている兵隊」『日本歴史物語』第七卷 一九五六年 河出書房版に所収。
- 18 利根光一『テルの生涯』一九六九年 要文社。
- 19 青山和夫 前掲書。
- 20 利根光一 前掲書。
- 21 同右、および本間七葉の談話。
- 22 三宅史平「ふたごの死」La Revue Orienta 一九四九年十二月号。

第十章 雲と火の柱——戦後の運動



由比忠之進の遺書

長田新氏編『原爆の子』がフランスで知られるようになったのはエスペラント語訳のおかげです。これからも日本文学のすぐれた作品をどしどしエスペラントに訳して外国に紹介してください。⁽¹⁾

小松 清

敗戦——運動の再出発

日本帝国主義はついに敗北した。

廃虚の中から社会主義勢力はふたたび立ち上がった。ある者はしいられた長期の沈黙を破り、ある者は昨日までの戦争協力で汚れた手を隠し、そして一握りの非転向者があちこちの刑務所や予防拘禁所の中から、というぐあいには民主日本建設のスローガンのもとに集まってきた。

しかし、日本社会党の憲法草案は、なおも天皇制護持をうたっていた。占領軍をどう規定するかということは頭の中にさえなかったようである。天皇制廃止をまっこうからふりかざした共産党は、本当の敵を見ましがえていた。マッカーサーに代表される占領軍を民主主義勢力とカンちがいのしたのであった。府中の拘禁所の中で書かれたという「人民に訴える」の根本思想は一九三二年テーゼそのものであって、敗戦によって大打撃を受けて変質をよぎなくされる天皇制を、なおも主要敵と規定し、面前に立ちふさがるマッカーサー権力を自己の同盟軍と考えたのであり、またコミンテルン第七回大会に集約された人民戦線運動の思想と経験を丸きりと言ってもいいほど無視したものであった。

にもかかわらず、共産党は不屈の活動をつづけた。全国いたるところに労働組合と農民組合、市民運動を組織していった。食糧メーデーを組織して千代田城内にまでおしかけた。二・一スト禁止にはじまる一連の反撃にいたるまで、共産党はその創立以来はじめての黄金時代を迎えたのである。

こうした状況の中で日本民主主義文化連盟の活動が進められた。新日本文学会、民主主義科学者協会等々、……それはかつてのコップ（日本プロレタリア文化連盟の戦後版であった。ここでは、かつての図式的な、専門家の組織、その基礎としてのサークル……などの思想がそっくりそのまま再生されていて、唯一の差は、かつての「共産主義」の看板が「民主主義」に塗りかえられただけであった。占領軍撤退と民族独立を当面の課題とせず、ミイラのような天皇制を正面の敵としてとらえているかぎり、また人民戦線運動の経験の空白、ないしは拒否の上に立っているかぎり、これが当然のことであった。それにもかかわらず、民主主義革命のトウトウたる勢いは、日本の流れを支配するものであった。しかし、いくら「民主主義」の名を冠してみても、文化連盟そのものは、のちに『アカハタ』を発行禁止された共産党が何ら抵抗を受けることなく文化連盟の機関紙『文化タイムズ』を『アカハタ』後継紙にしたことによって証明されるように、事実においては共産党フラクションによって左右される党の出店の存在を出ることができなかった。これまたコップの再版である。

こう書きたてることによって、筆者は党の文化政策の無能をあげかけているのではない。反対にこうした方針に抵抗するどころか、無批判的に盲従したことを自己批判しているのである。

戦後生まれた日本エスペラント協会は、まさに文連エスペラント版そのものであった。

E・O・ライシャワアの序文をつけた『日本の赤い旗——日本共産党の三十年』という本がある。⁽³⁾いかにもキワものくさい本であり、また吉田東祐なる人の訳文そのものに関するかぎり、疑いもなくキワものであるが、その内容について言えば、ことごとくキワものとしてしりぞけることのできない

ものがある。いわば、P・ランガー、R・スウェアリンゲンという、二人の「日本語ばかりでなく中国語もロシア語もできる」アメリカの研究者が「日本の警察その他の政府機関からの詳細な記録」などを占領軍の助けを借りて入手して書きあげた「実録日本共産党史」である。「実録」が実録としてとどまるかぎり、被検挙者中のおしゃべりたちの「供述」、あるいはカモフラージュをもとにしており、この書の事実のすべての記述が正確とは言えぬ。しかしちょっととした読物であり、当の日本共産党が発表した自己の歴史に、しばしば固有名詞が脱落していたり、戦後の党の中心人物の検挙で党史の記述が断ち切られるというような致命的な欠陥があるかぎり、この種の読物にも一定の価値がある。もっともこの本の翻訳はヘタだし、事情を知らぬ人の仕事だから固有名詞の誤りは全ページいたる所にあると言ってもいいくらいだが。

前置きが長くなったが、この本の第二部のはじめに、いきなりエスペラントのことが出てくる。

「一九四五年九月二日、日本の天皇の代表は正式に敗戦を認めた……内務省のファイルにあった秘密書類は、降伏の前夜、政府がいかにか戦後日本における共産主義の再起をおそれていたかを明らかにしている……八月十六日、中部日本では『元の共産黨員』が『われわれの時代はついに来た』といったために逮捕されている。翌日、東北地方では共産主義容疑者が国家の敗北を祝ったかどで摘発された。その一週間後に、警察は親共産主義エスペラント運動の復活を恐怖をもって報告して

くる」

卷末の注によれば、このエスベラント運動についての記事は、内務省警保局保安課第一係筆記「戦争終結に特別関係ある共産党分子の間にある諸傾向 一九四五年」によるものとされている。しかし、われわれは残念ながら、この活動がいつ、どこで、だれによってやられたものかを、つかむことに成功していない。(もしもこの不正確な訳文の文脈から、この事件をその前の「東北地方」に続け得るとすれば、この運動は秋田雨雀・淡谷悠蔵・大沢久明らが青森を中心にはじめたものに該当するのだが、この地方の機関紙『Nord』(『北』)に見られるかぎりでは、当局を「恐怖」させるほどのものではない)しかし、日本エスベラント協会がこういう中で生まれ、また、こういう情勢が変化していく中で滅びていったことだけは事実である。

戦争中に機関誌の発行を停止し、また、そのことによって、こうした弱い組織の常として、自らの活動を打ち切ってしまった財団法人日本エスベラント学会は、一九四五年十月に、わずかA5判八ページにすぎなかったが、その機関誌『La Revuo Orienta』を再刊することによって、その運動を再開した。それは別の言い方をすれば、運動の再出発であった。かつて比嘉春潮は日ましに軍国主義化する機関誌をみて、「ぼくの考えているエスベラント運動ではない」と自ら脱会し、また斉藤秀一が入会をあえてしなかった組織であり、同時に中垣虎児郎その他の旧プロ・エス系の人たちの事務所への出入りをご遠慮願った学会ではあったが、戦後の再出発にあたっては、初心にかえって、あらゆる傾向のエスベラントにその門戸を開放したのである。そうだ、藤沢親雄その他の戦犯的人物さえも、もしも望めば、自由に出入りできる寛大さをもって再出発したのであった。しかし注意すべきこ

とは、この学会再出発の宣言とも言うべき「海外の同志へ」のアピールには、自分たちの戦争協力に対する自己批判が全然見られなかったことである。

この年の十二月十六日、日本エスベラント大会が開かれた。参加者はわずかに七二人。軍服軍靴、背のうやり、ユックサックに食糧をつめた人たちが、幸いにも戦災をまぬかれた本郷元町の日本エスベラント学会の建物にあふれた。このとき、西岡知男・栗栖継を中心とする大阪のグループから、エスベラント界の戦犯追求をもとめる議案が送られて来た。新日本文学会の創立総会に小田切秀雄らが提出したものと同一形である。ちがっていることは、新日本文学会のそれのように具体的な人名があげられていないことと、ここでは「戦犯」そのものが同じく会員であり、あるいはこの大会そのものに出席しているということであった。「議題はそれ自身非常に重要なものであるが、肝心の提案者が出席していない。そして内容はエスベラント大会で討議するのにふさわしいとはいえず(4)」。こういう小坂狷二の発言でこの提案は流産した。その昔、ロシア飢饉救済運動の提案を握りつぶしたのと同じ手である。提案者自身が欠席するという不手ぎわもまた同様。

その翌年の六月に次の大会が同じく東京で開かれるまで、日本エスベラント学会の幹部派、それに對する旧プロ・エス系の人たちの両者の間で、それぞれの目算が立てられ、虚々実々か、虚々虚々かの交渉がなされたように思われるが、開かれた大会では、新事態に備えるため日本エスベラント協会を運動の中核として創立することが、実にあっさり可決されたのであった。

ここで少しばかり、日本エスベラント大会なる虚像について考えてみる必要がある。労働組合などの大会と同一視すると、エスベラント大会を誤解してしまう。労働組合のそのように、下部から選

出された代議員による運動方針の討議などというようなものは、ここでは見られない。この大会には、エスベランチストでさえあれば、あるいはエスベランチストでないものであろうとも、参加費さえ払えばだれでも参加できるのであり、その大会の決議なるものも、実質的には何者をも拘束するところができないもので、いわば任意の者の任意のお祭りの、観光団の集合にすぎない。主催するのは、それぞれの地方団体であつて、それ以外のものではない。もつとも、いささかスコラ的に言うると、一九一九年に日本エスベラント学会が創立され、黒板勝美らの日本エスベラント協会が実質的に消滅したとき、学会派のお情けで、「今後、協会は大会の主催者になる」と決めていたので、ちょっと事情がちがうのであるが、今ではこんな決議そのものが忘れられてしまっている。

そして日本エスベラント学会が、文部省所管の「財団法人」であることも忘れてはならぬ。規約上から言えば、この財団の運営にあたるのは、理事長に任命された理事会とそれを助ける評議員会であり、いわゆる「会員」は単なる「寄付者」にすぎない。もつとも、さすがにこの規約は、事実上相当手心を加えられて運営されているのだが。

もう一度言うと、こうした大会で、秋田雨雀を会長とし、三石清を書記長とする日本エスベラント協会が創立され、学会と守備範囲の協定をして、運動の中心は協会、学習と研究には学会があたるということを決めてみても、全国の地方エスベラント会や個人に対して何の強制力をも持たなかった。第一、運動と学習を切離すことほど、非組織的なことはなかった。

真相は、学会側の、日本民主主義文化連盟に代表される戦後民主化の波に対する考えにあった。すでに文連は学会に対して、ローマ字会などと同じように、加盟することをいくたびか要請していたし、

学会内部にもこれに呼応する勢力が相当大きかった。しかし、学会当局は、文連の意図する方向を正当にも見破っていた。「共産主義に対する防波堤」をつくることか、ここでも何よりの急務だったのだ。

旧プロ・エス系の人びとも、また学会のこうした体質は知りすぎるほど知っていた。そして自分たちが自由に動かせる団体を求めていて、文学者や科学者などと対等に文化革命を推進するためにいささか性急とも言える熱意に燃えていた。

この二つの考えが日本エスベラント協会創立という形で妥協点を見つけた、というのが創立当時の運動に加わることができなかった宮本の判断である。大島も今日ほぼ同意見である。

こうして創立された日本エスベラント協会は、中垣虎児郎を編集者として機関誌 *Nova Pronto* (『新しい戦線』) を発行して、そのもとに旧プロ・エス系の人たちだけではなく、全国の民主的エスベランチストを結集したことは事実であるが、残念ながら、運動と学習の分離という誤った方針からは、前記のように文連加盟の一体になったことと、まもなく創刊された *El Popola Cinio* (『人民中国』) の取次をして広めたことのほかに、認められるべき仕事はできなかった。一九五〇年のレッドパージで、東京・大阪を中心とする数少ないサークルの圧倒的部分を破壊され、ウィロビー書簡による集会制限などで、その総会が流産すると、ついにその年の末に自発的に解散してしまつたのも、あまりにも当然すぎるほどであった。誤った文化運動組織論の第一の犠牲者である。

この時代のエスベラント運動の成果として言えることは、一九四七年四月に *ルイ・サイヤン* などの世界労連代表者が来日したとき、「人民広場」に *Bonvenon* (『ボンヴェンソン』) と *Proletoj de ĉiuj landoj*

unigu vin (全世界のプロレタリア団結せよ)のスローガンが、日本語とエスペラントでかかげられたことである。協会はこれに関与しなかったが、当時の全労連(全国労働組合連絡協議会)の幹部には、吉田資治などのエスペランティストが多くいたのであった。もっとも、総司令部の干渉でサイヤンたちはあいさつどころか、顔を見せることさえできなかったのであるが。

関西ではいくぶんか事情がちがった。頭デッカチの東京、実力の関西というのが、労働運動の中でも通用する関西人の考えで、そのため東京人にたえずいやがられるのであるが、エスペラントの場合でも同じであった。レッドパーシは協会翼下の職場サークルの大部分を破壊したが、それでも主力となる大阪・神戸・京都のエスペラント会は健全であった。とくに京都には人文学園があった。日本エスペラント運動の先駆者のひとりであり、ザメンホフと会った日本人最後の人である『広辞苑』の新村出の次男、人民戦線運動で投獄された経験を持つ新村猛が創立したこの特色ある私立学校は、羽仁五郎のすすめもあって、一九四七年の七月から、はじめには栗栖継、のちにはこの学校の主事である佐々木時雄を指導者として、エスペラントを選択科目にしていた。(5)この学校の思想的伝統として、戦前の人民戦線文化運動としての雑誌『世界文化』がひかえていたことを見がしてはいけない。

こうした関西のエスペランティストは、協会解散の翌年の五一年三月には早くも関西エスペラント連盟に再結集し、機関誌『La Morado (運動)』を中心に組織を拡大していった。協会時代でも、大阪選出の中央委員二名のうち、一名はカトリック、一名は共産主義者であったことが示すように、関西の運動は文連や協会のテツをふまなかった。それはあくまでも組織としては、政治的・宗教的中立を

守りとおし、加盟団体や個人の政治的・宗教的活動をいっさい拘束しないものである。この本が出るころには発行されると思われる世界エスペラント協会会長の名による『エスペラントの展望』という本には、「関西連盟は創立されると同時に、日本の運動の第二の中心になった」と書いてある。

原爆反対のために

関西連盟が取り組んだ最大の仕事は、原爆に対する戦いであった。すでに『きけわだつみのこえ』の抄訳を出していた関西連盟は、長田新編『原爆の子』が発行された直後の五一年九月、この本の抄訳を作る運動を起こすことをアピールした。それは従来の翻訳にないやり方であった。まず抄訳すべき部分を選んだ——これはのちに映画「原爆の子」ができあがってみると、その重要場面とほとんど完全に一致した——。それを参加希望のサークルに必要な基金募集額とともに割当てた。サークルではそれを教材として翻訳研究会を組織し、全員で同じ文章を訳してきて、その訳文を持ちよって討議し、それを指導者がまとめ上げる。こうした方式が、比較的たくみに運営されているサークルでは実現した。連盟の編集委員はそれらを集めて訳文の統一や訂正をした。この本の発行に必要な金はエスペランティストだけにたよらなかった。労働組合をはじめとする多くの大衆団体に訴え、また文化人の支持をあおいだ。末川博や桑原武夫などが、このエスペラント訳推せんの記事を書いてくれた。



『原爆の子』翻訳の反響（右はベトナムの新聞）

「金集め、こういうことは非社交的なボクに
って一番の苦手です。五〇〇円集めなければな
らないとなれば、むしろ自分のサイフをはたい
て五〇〇円出してしまいたいくらい。だけど、
こういうことではエスペラント界全体の資金が
ふえたことにはならない。……『原爆の子』エ
ス訳は単にエスペラントだけの話ではない、全
人類の問題である。だから、一般の人たちもこ
の企てには興味と熱意をもって協力してくれる
と考えたのです。……学生大会が開かれるとい
う話。こいつに一つ発言してその場で集めてや
ろうと思いつきました。……それで前日に、大
会準備委員会に出席する自治委員の一人にくわ
しく説明して、プログラムの中に資金カンパの
項目をいれてくれるようにたのんでおしまし
た。……当日、即製の紙袋を三つ四つ用意し
て、生れてはじめてこんな所で発言するという
興奮と恐怖とで一パイになって会場にのぞみま

した。……後で帰ってきた紙袋の中には、一円札、五円札など小金を集めて一千円ほどありまし
た。結局、みななのフトコロ内を掃除してきたようなものです。金がなくなったものだから、後で阪
大新聞が売れなかった、と新聞部の人がこぼしていたそうです……」⁽⁶⁾

こう書いた人は、現在たしか大阪大学工学部の教授であると思う。

こうした金と訳文でできあがった本は、海外のエスペランティストに大量に送りつけられた。

エスペランティストの原爆に対する取り組みは、実はこれが最初ではなかった。協会解散の前後に、
丸木位里・俊夫妻の絵本『ピカドン』にエスペラントの説明文をつけて海外に送る運動を起したこ
とがあった。栗栖継がよく働いたことをおぼえている。京大同学会が京大エスペラント会の働きかけ
で、同じ丸木夫妻の「原爆の図」の絵はがきを作って海外へ送ったこともあった。これがフランス共
産党の機関紙『リュマニテ』にのって、「原爆の図」の紹介の、フランスといわずヨーロッパで最初
のものになった。こうした一連の経験が『原爆の子』の場合に最大限に生かされた。

「ヒロシマについてのパンフレットありがとう。全世界はこれらの物語をよまねばならない。も
しもここから日本までの旅費がそんなに高くなかったなら、ぼくはすぐに出かけ行って君らと話
したいんだが」

こう書いてきたのは、『ザメンホフの生涯』の著者、世界エスペラント協会名誉会長であったエド
モン・プリバーである。この人はロマン・ローランに音楽を習った人で、日本語訳『ロマン・ローラ
ン全集』の第何巻かの「戦いを越えて」の中に、この人あてのローランの手紙がはいっている。

「君の指示したとおり、ぼくらはあの二冊を郭沫若同志、宋慶齡女士に手渡した。彼らはこの歴史的記録をみて諸君の仕事を喜んでくれた。そのうちに時間をみつけて感想文を書くといっている」
エスペラント版『人民中国』を編集していた馮文洛はこう書いてきた。もつとも、郭と宋が本当に感想文を書いたかどうかは、残念ながらわからないのであるが。

「目をつぶって、ええ、私は本当に、読みながらもしばしば目をつぶってしまいました。あなたを送って下さった本のおかげで、昨夜はとうとう眠れませんでした。朝になって夫に話したところ、夫も『ぼくも背中やお尻が何だかはれ上がってくるような気がして、むずかゆくなってきたよ』と言っています。

学校で私は生徒たちに（私の受持は三年生です）あの広島の子供の作文の一編、坂本節子さんのところを訳しながら読んでやりました。いつもは騒いで私のいうことなどロクに聞かない子供も、今日はシーンとして、だれひとり何も言わないで聞いておりました。私の声だけが、妙に耳にひびいてはなれず、私はまるで何かにつかれたように読んでおりました。

原爆の恐ろしさは、この手紙を書いている今も私を放しません」
これはH・クヴァンテスというオランダの女教師の手紙である。

そしてオーストラリアの輸出入商のL・メンガーは書いてきた。

「君も知っているとおりの僕は決して親日家ではない。それどころか戦争中に日本軍が犯したかずかずの犯行で、日本人を憎んでいたのだ。しかし、あの本をよんで僕の考えは変わった。広島・長崎の惨劇に比べればバター半島死の行進といえども物の数ではないだろう。僕は今後当地で本当

の日本の姿をみんなに伝えるために働きたい。あのろうべき戦争は決して日本人民と相談すくでやられたものではないんだ」
もうひとつ。

「私は初めて知ってびっくりした。私たちの知っているのは、せいぜい八、九万人が殺されたんだらうぐらいだったのだ。二七万といえはドイツの中ぐらいの町全体だ。言語に絶する犯罪である。私の妻は君の送ってくれた本を読みかけたが、こわくなって眼を閉じた。ドイツ、とくにこのハンブルグは徹底的に破壊されているが、広島や長崎と比べたら何でもない。

私たちの国は四か国に占領されており、ナチから解放されたとはいえ（私自身米英軍に収容所から助けられた）、ドイツ人はかれらを憎んでいる。祖国のどこかに旅行するのに月世界へ行くほど難しい手続きがあるのだ。

こちらの雑誌に複製できそうな広島・長崎の写真を送ってもらいたい。幻灯の材料になるものもたのむ。私らの平和運動は理屈ではいけないのだ」

こう書いたのはヘルマン・テオバルト。『ドイツ抵抗の記録』というエスペラントの本の編者である。この本から宮本は例のシュルツ兄妹のレジスタンスの話をも民主主義科学者協会大阪支部の機関紙で紹介した。未来社の『白バラは散らず』が出る二年ばかり前のことであつたと思う。

エスペラント訳『原爆の子』については、当時の新聞が大なり小なり報道した。書かなかつたのは共産党機関紙だけであつた。「分裂した党の一部」の中央に、戦前の労働運動時代からこの本の関係者の宮本と対立していた志田重男がすわっていたせいかもしれない。エスペラントを弾圧したソ同盟

でも、たしか『サヴェツカヤ・アルメニヤ』か何かがこのうちの一篇の翻訳を出したと思う。全世界をゆすぶったといつては、いささかオーバーであるが、ジャーナリズムのあるかぎりの国では、なんらかの新聞雑誌が『原爆の子』のことを書いた。残念だったことは、いくつかの重訳の申込みが、おそらくのちに出版した英訳を準備していた編者の手で握りつぶされたことである。アンドレ・マルロオの代弁者のようなフランス文学者小松清が書いたことは、この章の冒頭にある。

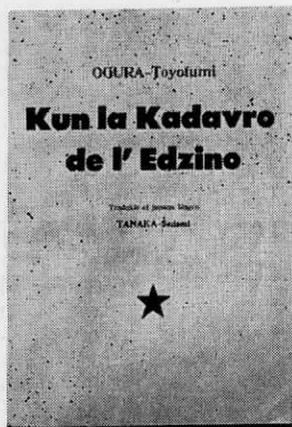
『原爆の子』の経験は、ひきつづいて行なわれた清水幾太郎・宮原誠一・上田庄三郎共編『基地の子』の抄訳のときに、さらに発展した形で生かされた。すなわち、全倉庫労働組合や明和自動車労働組合など、鳴尾分会などの大会では、基金募集が議案として提出され、組合あげての支援活動となった。大阪市職員組合・阪大理学部自治会・婦人民主クラブ大阪支部なども応分の活動をしてくれた。奈良ではおりのからの基地反対闘争と結合して、市民との座談会を開くことに成功した。こうした動きは、単に経済的なものにとどまらず、エスベラント運動を社会全般の動きと結合するものであった。しかし、『基地の子』の場合では、この本ができあがったときに日本の基地反対闘争が谷間におちこんだときと重なり合い、社会的反響はあまり大きくなかった。

関西連盟の外郭的な仕事としてこの他に松川事件での活動があった。

チェコのエスベラント、ブルダ・ルドルフは、スターリン体制に追従するチェコ当局のエスベラント運動禁止に対抗して半合法的な活動をつづけ、ついにこの国の運動の復活に大きな役割を演じた人であるが、一九五二年だったかに、チェコで募金してそれで衣料や食品などを「日本の平和愛

好者へ」として各地のエスベラントや進歩的文化人あてに送ってきた。たしか、このうちに大山郁夫なども含まれていたような気がするが、中にはなんでもない堺の中学生なんかにも送られたものもあった。国民救済会にこの連絡がいつて、送られてきた品物を寄付してもらって、これをおりからの松川事件の被告たちに差入れたのである。これが『松川事件全史』の伝えるチェコの救援活動の真相なのだが、もちろん当然の権利とも言えるのだが救援会へ供出するのを拒否した人もいた。この救援物資のおすそわけで、当時大阪刑務所に鈴木警視総監報告事件か何かではいつていた下司順吉が『新日本文学』に感謝の詩を書いていたのをおぼえている。しかし、この松川事件でエスベラントのうち少し偶然的でない活動も見られた。赤田義久が書いた『松川』という一六ページばかりのパンフレットがそれである。それが世界各地へ送られて、裁判長へ抗議の手紙が何か国から来たものであった。

日本学生エスベラント連盟はモスクワの世界青年平和友好祭に際して『日本の学生から』というパンフレットを作った。しかし、序文をよせた当時の全学連委員長香山健一は、しだいにバケの皮をあらかわして、一九七三年七月十日の新聞によれば、小選挙区制賛成のメッセージを発表した七十何人かの「知識人」の一人になるまでダラクしてしまっている。エスベラント婦人協会は『日本の貞操』を出して、アメリカ兵の暴行をとりあげたし、また当時の日紡貝塚工場などの生活つづり方運動と結合して『紡績女工の生活』を出した。関西連盟自身としては、日本エスベラント大会の決議にもとづいて『死の灰』というパンフレットを作っている。ビキニ事件で殺された久保山愛吉さんのことなどを中心にしたものである。



『妻の屍を抱いて』のエスペラント訳(左)とベトナム語訳(右)

研究に独自の仕事をした広島大学教授小倉豊文が自分の経験をまとめた『絶後の記録』を著者自らが要約したものを田中貞美が翻訳し、大島義夫が校閲し、それに丸木夫妻の「原爆の図」などを挿画にしたものであって、関西連盟の手で発行された。それは発行後二年余りで、東西ドイツでそれぞれの翻訳、ブルガリア・ポーランド・ハンガリー二種、リトワニア・ベトナムで、あるいは雑誌に連載され、あるいは単行本になった。とくにベトナムでは国立出版社から発行されてベストセラーになり、ブルガリア政府は平和功労者として著者と訳者に表彰状を送ってきたのである。こうした事実を知らずに、また調べようもしない今堀誠二という人が、三一新書の自著の中で、この原文とエスペラント訳のことにイチャモンをつけているのは、ちょっとした愛嬌あきかほというものである。かれの言おうとするところ、この本の内容に社会主義的なものがないことは事実であるが、原水爆反対の戦いで必要なことは、理論的な解明だけではなく現実の悲惨を訴えることである。理論的な解明とやらをおし進めると、「ソヴェート(あるいは中国でもよい)の放射能の雨じゃ、ぬれて行こう」というこ

しかし、こうした集団翻訳の仕事はしだいに困難に陥った。第一にあげられる原因は、原水協その他の団体に起こった分裂である。エスペラントという言葉を統一の場に行っている団体にとっては、こうした政治的分裂は致命的なものになった。へたに動けば、エスペラント団体そのものまでが分裂して、ついには空中分解してしまう危険があるのだ。もう一つの問題は、集団翻訳としての性質上、どうしても訳文そのものがアカぬけしないもので、どう考えても名文には縁の遠いものになってしまうことである。原水協の分裂以後、関西連盟を先頭にした日本のエスペランティストの平和運動へのエスペラントを通じての関与はしだいに後退していった。もっとも「世界平和とエスペラント運動」というような団体の国内組織が、エスペラントの土俵そのものから、しばしば離れた形で、原水協の運動に参加していることも事実であり、ベトナム救援活動に積極的に動いていることを見のがしてはならぬ。

こうした大衆的な基金募集や共同翻訳という方法をとらずに、個人的に、または意識的な少数のものによる原爆反対のエスペラント活動もあった。

梶弘和や小林司たちは『黙ってはいられない』というパンフレットを作った。ここでは広島島の惨状を訴えるだけではなく、医学的解明にまでつっこんでいた。山口仙二が書いた『美しい平和を』を石黒彰彦が訳して、東京の有志が贖金あかぬけしてパンフレットにした。長崎の原爆を取り扱ったものである。こうした個人的、または少数者による仕事の場合は、当然のこととして訳文のムラがなくなり、比較的まとまったものになる。大衆運動という美点と引きかえにするわけであるが。

こうした典型的なものは、『妻の屍を抱いて』のエスペラント訳であった。聖徳太子や宮沢賢治の

とになって、原爆反対の闘いに人民を決起させることなどは思いもよらない方向に陥ることもある。

一九七三年には九州エスベラント連盟が、長崎県平和教師の会の『ナガサキの原爆読本』の共同翻訳と出版に成功した。これの評価はまだ定まっていはいないが、こうした運動がもはやアウトサイダー視されることがなくなったことをも示している。

『世界の子ども』を編さん

一九五三年十一月、平凡社は特異な企画を発表して、世界のエスベランチストの協力を要請した。同社が先に作った『綴方風土記』の成功をふまえて、世界の子どものつづり方と絵画を集めて、それを中心にした風土記『世界の子ども』全十五巻を作ろうというのであった。発案したのは伊東三郎と坂井松太郎であったと思うが、平凡社編集部にいた、人文学園卒業の吉田九州穂がこれをおし進めたのである。

この仕事の前には、PEK（プロレタリアエスベラント通信）の実績があった。とくに栗栖継は戦後も強力にこのことを進めて、戦前戦後の通信集二冊を発行していた。『同じ太陽が世界を照らしている』と『世界の声』である。こうした通信活動の実績なくして、この企画はとうてい立てられなかった。

まず『綴方風土記』の中からすぐれた文章を選んでエスベラント訳し、各国のエスベランチスト、

とくに教育関係者に送りつけ、それを各国語にしてもらって、それぞれの国の児童の間に持ちこみ、そこから作品を吸収しようという考えであった。平凡社囑託としてこの仕事にあたったのは、時間的に前後して伊東三郎・栗栖継・高山図南雄らであり、エスベランチスト外からも、たとえば、ロシア語の松本傑（樹下節）などが加わった。しかし残念ながら仕事はスムーズに進まなかった。

第一に調査の不十分があった。日本できわめて高度に発達した生活綴り方運動は、それ自体、戦時中の良心的教育者の抵抗運動のひとつとして展開され、生活を見つめることによって現実の社会に対する批判と抵抗を呼び起こそうというものであったが、こうした動きは、実は世界じゅう、どの国にもない特殊のものであった。フランスにしても、ドイツにしても、存在するものは、「模範作文」ばかりであることが、この仕事の過程で発見された。そこで仕事は、生活綴り方の意義そのものを教えるところから再出発しなければならなかった。しかも、これには相当の抵抗があった。たとえば、ソ同盟のすぐれた児童文学者、『森は生きてゐる』のマルシャークのごときは、「趣旨はわかった。資本主義社会にとっては良い教育法であることにまちがいはないが、社会主義社会にそのまま適用することは無理かも知れない」というようなことを書いてきた。第二は「底ぬけ三平」こと伊東三郎に代表されるような非事務的な仕事ぶりであった。伊東たち(?)は、本を作るために雇われたことを忘れて、平凡社お雇いの児童文化運動者のごとく行動し、「世界の子どもの会」を作るためであるかのように熱中したのであった。それに政治的見解の対立というような問題も加わっていた。

第一巻『フランス編』が一九五五年二月に発行されたが、しばらくして仕事はノロノロと動かなくなってしまった。たまりかねた平凡社児童部長の吉田九州穂は自ら陣頭に立ち、スタッフを一変し

老人、焼身自殺はかる



官邸正門前の歩道で

見込みない沖繩 「北爆支持」に深い憤り

抗議書内容

一九六六年十一月、東京・関西の有志を発起人としてベトナム平和エスペラントセンターが作られた。一九六六年十一月、東京・関西の有志を発起人としてベトナム平和エスペラントセンターが作られた。一九六六年十一月、東京・関西の有志を発起人としてベトナム平和エスペラントセンターが作られた。

由比忠之進の自殺を報じた『読売新聞』

れではいかにも不十分であった。もうひとつ、ここには直接関係のないことだが付記せねばならぬことは、日本などの資本主義国からソ同盟へ世界平和エスペラント運動の機関誌を持ちこむことさえが不可能であったことである。この国へ送り届けるためには、東ヨーロッパの社会主義国を経由しなければならなかった。

て、本を作る仕事に切りかえた。そして五八年一月にようやく最終巻を発行した。しかし前記のような各国の状態からして、その内容は当初の期待をだいぶ裏切ったものになってしまった。吉田を助け仕事を完成させたのは、中垣虎児郎・坂井松太郎・福田正男らであった。

もつとも政治的な死——由比忠之進の焼身自殺

フランスに代わるアメリカのインドシナ進出は、冷戦をやがて熱戦に変え、トンキン湾封鎖から全面的なインドシナ戦争になり、ベトナム各地はアメリカ軍の直接攻撃にさらされるようになった。MEM（世界平和エスペラント運動）はまっ先に抗議の声をあげた。MEMの会員は、あるいは個人的に、あるいは集团的に、ベトナム支援の運動を起こすだけではなく、エスペラントによるベトナム支援のために働いた。こうした中で、四冊の本がベトナム語→エスペラント→日本語と重訳で発行された。岡一太・星田淳共訳『トー・ハウ』、井出於菟ほか訳『炎のなかで』、井出於菟・栗田公明共訳『袋小路』、栗田公明訳『最後の高地』などのベトナム小説の翻訳がそれであり、この戦争の真相と戦う人民の英雄を日本人に紹介しただけではなく、ベトナムの同志と世界のエスペランティストに大きな刺激を与えたのである。

情勢は刻々と変化する。それに対応すべきMEMの機関誌 Paco（『平和』）は、社会主義国家からの国外送金が事実上不能であるところから、機関誌の発行を各国回りもちで出しているのであるが、こ

れ、Pacon en Vjetnamio (『ベトナムに平和を』)を大阪で発行しはじめた。それは、メムの機関誌のように、しばしば共産党ジャーナリズムから取材する偏向を避け、広く各方面からのベトナム反戦非戦の声をとりあげて各国へ送り出した。キリスト者から新左翼にいたるもろもろのニュースを紹介した。商業新聞の投書からもとりあげた。ポーランドのワルシャワ放送、フィンランド・フランスなどの新聞がこの機関誌から翻訳して発表した。本多勝一——これまたエスベランチスト——のすぐれたルポルタージュ『戦場の村』の翻訳を連載し、のちに単行本にした。⁽¹⁰⁾ソ同盟その他の諸国のチェコ侵入に反対の声明文を掲げ、ドイツ民主共和国で禁輸の措置をとられたこともあった。

そして——一九六七年十一月十一日。

「午後五時五〇分ごろ、官邸前交差点わきの歩道を歩いてきた老人が突然、ほのおに包まれ、あお向けに倒れた。通りかかった新宿区西大久保四六 日本電電公社職員本田吉晴さん(二一)が近くにいた警官二人と協力、通りかかったタクシীর消火器や官邸に備えつけの消火器で消し、近くの港区赤坂葵町の虎の門病院に収容したが、頭、顔、胸など上半身に大ヤケドで、上着はポロポロに焼け、髪はほとんど燃えつきていた」⁽¹¹⁾

NHKテレビは直ちに、この老人は所持品からおして、ユヒ・タダノシンさんらしいと報じた。日本中のエスベランチストはとび上がっておどろいた。ユイ・チュウノシンであることがすぐにわかったからである。

由比は十二日訪米しようとする佐藤栄作に対する抗議文を持っていた。ベトナム侵略をつづけるジ

ヨ
ンソン政府とそのカイライ日本政府首脳に抗議して自殺したのであった。

「今日自殺決行するとなるとやっぱり興ふんすると見え一晩中抗議書作成その他で一睡もしなかつたが少しも眠くなかつた。

朝出掛けるに当って机上を整理したのだが静は何等疑いをかけなかつたので落付いて出掛けられた。

死期が迫っているにしては冷静でおられると思つて居たのだが虎の門に近づくに連れ胸がどきどきしだした。首相公邸に近づくに連れ益々はげしくなつた。やっぱり死と云う事は大変な事だ。

愈々公邸の前に来たが通行人が一杯で到底決行が出来ないので素通り、夕方迄待つ事にし遂に山王に来た。石段に掛けて之を書いた。」(原文のまま)(この章とびら写真参照)

「内閣総理大臣佐藤栄作閣下」とボールペンで書いた抗議文を入れた封筒を、別の大きな封筒に入れてあった。その外側にこう書いてあった。そしてその裏側には「焼身に成功したら写真器は左記の人に渡して下さい。文京区本郷二丁目日本エスベラント学会 三宅史平氏」とあった。

世に数多い遺書の中で、これはもっとも美しいひとつであろう。暖かい人間の血が脈うっていて、読む人の心をうつ。

ところで、エピソード的に書くならば、由比の自殺決行を少しばかり遅らせた大勢の通行人は、鶴

見俊輔らベ平連のグループであった。彼らは首相官邸へのへたりこみから追い立てられて帰る途中であって、時間的には完全に符合している、と宮本は鶴見から聞いた。そして、注を入れるならば、文中の「静」はしずか夫人のことである。

翌日、満州時代の親友の娘が偶然勤めていた虎の門病院で由比が息をひきとるころ、売国奴エイサクはアメリカへ飛び立ったのであり、山崎博昭が乱闘の中で殺されたのであった。

その翌日、宮本はベトナム平和エスプラントセンターにあてられた由比の手紙を受けとった。中には十月六日の日付でアメリカ大使館気付でジョンソンにあてた由比のエスプラント文の抗議文のコピーがはいっていた。由比と横浜エスプラント会とともに働いていた土居敬和も同じものを受けとった。それは、ただちに日本語に訳されて、四〇〇名を集めて開かれた二十二日の大阪の追悼集会で参加者に配布され、のちに雑誌『世界』⁽¹²⁾にのった。追悼集会は名古屋・東京・姫路、それに由比の故郷福岡県前原町などでも開かれた。

これ以後、毎年十一月十一日前後に、少なくとも東京・大阪・名古屋では、規模の大小の差はあれ、由比祭が開かれている。

由比忠之進の略伝はその長女蔵園正枝^{くらどのまさよ}によってすでに書かれている。その思い出もまた⁽¹³⁾したがって、ここで長ながと述べる必要もないが――。

一八九四年十月一日、由比は福岡県糸島郡前原町に九人兄弟の四男として生まれた。日清戦争の最中で、忠義な人となるようにと忠之進と命名されたと言う。前原町は古代遺跡の発掘で後に有名にな

ったが、『魏志倭人伝』の伊都国というのが、ここらあたりであったと比定されている土地である。

一九一九年、蔵前高等工業、いまの東京工大を卒業したが、教師とケンカをして卒業免状のないまま、沖電機に一労働者として就職。この当時、友愛会の鈴木文治・松岡駒吉などと接触があったようだとと言うが、その確証は乏しい。小学校教師の静と結婚したのが一九二〇年。一九二一年にはエスプラントを習いはじめて、以後、一生をそれにささげた。それから家具屋になってみたりしたが、三二年には名古屋へ転住、三四年金沢放送局勤務、三六年には名古屋放送局へ転任し、この放送局（誤解するなかれ、ラジオである）でエスプラント講座の放送実現に努力した。そして一九三八年には満州へ。瓦房店の満州製紙に就職。その後、家族を帰国させて単身留用されて二年間人民中国のために働いた。この間、長谷川テルの病死を知ったのは前章のとおりである。

一九四九年に帰国して、京都山科の一燈園で奉仕。これは、蔵前の先輩で化学技術者である福田某という人の影響で入園したもので、個人的な煩悶を解決するためであったが、二年間で一燈園を去り名古屋へ移る。このころからエスプラント運動に献身的に働いた。名古屋エスプラント会の事務所がこの当時、名古屋の平和会館――元の産別会館――にあった関係から、愛知県平和委員会（代表者は新村猛）との接触がはじまり、その推せんで一九五六年十二月、中国へ招待された。帰国後、世界平和エスプラント運動の日本セクションの責任者、またエス文『人民中国』の仲介者となった。（当人の考えではこの雑誌の日本代表のつもりであったが、実は当時の極東書店、いまの東方書店や関西連盟など各地に仲介者がいた）。そして一九六六年、家族のいる横浜へ転居、妻とともに長男意出男の家に住んだ。なお、この意出男という名がエスプラントでつけられて、「理想」を意味するという報道がしばしばな

されているが、これは誤り。イデオは「理念」とか「思想」とかいう意味である。

由比が焼身自殺したとき、政府当局が極力知りたがったことが二つあった。その一つは、高齢の由比が何かの病気、たとえば、ガンか何かにおかされていないか、ということであった。もしもそうならば、前途を悲観して……と、いくぶんかその意義を小さくすることができるからであった。しかし、解剖の結果は政府の期待を裏切った。もうひとつは、由比の思想についてであった。とくに、なんらかの政党・セクトに所属していないか、ということであった。

由比はいかなる政党・セクトにも所属した人ではなかった。由比の思想を一言にして言えば、良心的平和主義者、戦闘的ヒューマニストということである。もともと、こうなったのは、中国革命以来のことである。さらに言えば、由比の満州行は結果において日本帝国主義の手先として働いたことで、それに対する自覚さえ持っていないような人であった。「紀元二千六百年」を記念して日本エスペラント大会が「肇国の地」宮崎で開かれたとき、満州からもっとも積極的に呼応したのは、由比忠之進その人であった。⁽¹⁴⁾しかし、そのヒューマニストとしての骨は失われていなかった。病気で釈放された満鉄事件の守随一を治療する勇気を持たなかった安部公房の父を非難した話はすでに書いた。

ある人は、由比が平和委員会に所属していたから、いわば共産党系だ、と我田引水的なことを言う。しかし、由比の頭の中には、そんなあれこれの党派はなく、あるものは平和愛好精神だけであった。その証拠に、由比は、平和委員会とはあまり仲がよい方でないべ平連を六七年の三月ごろにたずねて、『ワシントン・ポスト』に反戦広告を出すための基金を持って行っている。⁽¹⁵⁾蔵園正枝が語る父は、選挙のたびに棄権する人であって、革新政党それ自身の支持者ではなかった。⁽¹⁶⁾

ももっとつっこんで言えば、由比の頭の中には、いかなる意味でもの「政治」はなかったのである。それ自身「もっとも政治的な死」⁽¹⁷⁾をとげた由比ではあったが。かれは社会変革を要求する政治的平和主義者ではなく、社会進化だけを考える、しかし徹底的な平和主義者であった。

由比の焼身抗議には先だつものがあった。それはよく知られているように、ユダヤ系ドイツ人でアメリカにいたアリス・ハーズのそれであった。一九六五年三月十六日の夕べ、デトロイト市の中央部でこの八十二歳の老女がガソリンを浴びて火だるまとなって死んだのである。もちろんアメリカ政府のベトナム侵略に抗議したのである。⁽¹⁸⁾

このアリスもエスペランチストであった。一九五〇年代の終わりごろ、当時九州大学工学部に学んでいた星田淳はかの女とエスペラントで文通していた。かの女の側で平和運動が忙しくなるにつれて、この文通はしだいにとぎれていったのであるが。このことを星田から聞いて知ったアリスの書簡集『われ炎になりて』の編訳者芝田進午は、一九六七年三月某日開かれたアリス追悼集会でこのことを話した。もちろん聴衆の中にわが由比忠之進がいたことは知らずに。芝田を通じて、クエーカーとして絶対平和を主張するハーズの思想は、まちがいのなく由比において最大の共鳴者、最大の支持者、最大の同行者を得たのであった。

しかし、由比が焼身抗議を決意したのは、この講演よりも前のことであった。エスペラントで書いた由比の日記に次のように残されている。

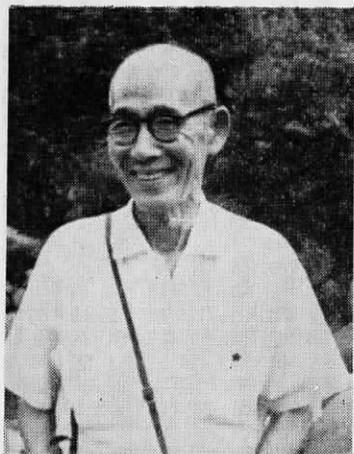
「二月十三日（月）健康について考えだすと、小生はだんだん自信がなくなってくる。そうしたとき、小生はどうなるか。病弱、老衰、孤独……それは小生には耐えられない。そんな不愉快をさけるためにも、同時にベトナム侵略の米国と佐藤内閣に強く抗議するためにも、焼身自殺を決行しなければならぬ。この考えは、日に日に、小生の心の中でふくらんでいく」⁽¹⁹⁾

由比の決意について、今になれば思いあたることもある。大阪に住んでいる宮本は、名古屋を離れて横浜へ移った由比とは、この年ほとんど会わなかった。最後に会ったのは、関西連盟が中心になって京都で日本エスペラント大会を開いたときである。このときの記念写真を後になって見て、宮本はおどろいた。由比が最前列にすわっているのだ。道路にマッチのすりかす一本を捨てることさえしない由比が、暗れがましく記念写真の中央にいるのは、すでに異常であった。また、そのとき宮本にこう言った。「横浜へ行ったのは失敗だった」。こんなことを書いて遺族のご不満のタネを作るのはどうかとも思わぬではないが、由比には横浜での生活が必ずしも快適なものではなかったし、またその原因が何よりも由比その人にあることを、由比はよく知っていたのである。この京都の大会のあと、由比は静夫人を同伴して故郷の前原町を訪れ、おそらくは、それとなく先祖の墓と知人に別れを告げたのである。由比の日記の中の「孤独」とは、これらの事実の上に立って理解されねばならぬ。そして、いま紛失して見いだせぬが、石堂清倫がたしか『声なき声』に書いていた、由比忠之進のさびしい顔つきの理由も、ここから推察することができよう。

しかし、あらゆる放蕩者が戦場で勇士でないように、家庭的孤独をおそれるあらゆる人が、焼身自殺して帝国主義戦争に抗議するわけではない。由比はまさに時代を超越した正義の人であった。

「佐藤首相は死を軽んじる由比さんの行動を悲しんだそうだが、しかし自分の生命の貴さを本当に知っていたのは由比さんの方だったかも知れない」⁽²⁰⁾

「吉田さんより由比氏のほうが、国葬にふさわしい。国葬よりも国民葬にふさわしい。しかし国民葬よりもさらに、エスペラント葬がふさわしい。由比氏の心は、国家的なもの、国民的なものものもっと遠くのインタナショナルな連帯のほうにむかっていたからだ。だが、葬式の名前などはどうでもいい。由比氏は七十三歳の最後の日まで、現代の状況の中でほんとうに生きていた人だった」⁽²¹⁾



ありし日の由比忠之進
(1964年、木曾にて)

由比忠之進は朝日新聞社が出した『原爆体験記』の翻訳にとりかかり、そのうちの九編を訳し、出版資金の一部として一〇万円を原稿とともに福田正男に送っていた。福田はさらに多数者の支持を得て、この本を出版した。巻末には由比事件の明細がついていた。関西連盟は横浜エスペラント会と共同して「エス訳『原爆体験記』を海外における会」を作り、基金募集をしてこの本を各地のエスペランティストに送った。エスペランティスト以外

から金を集めるのは、すでに関西連盟のお家芸になっていた。静未亡人も由比の印税をこのために送ってくれた。広島牧師、姫路の反戦カトリック、その他の人びとも快くこの仕事に協力してくれたのであった。

アメリカの婦人エスペランチスト、ミネルヴァ・リースは、由比の「ジョンソン大統領への抗議文」を日本の文通者から手に入れると、ただちにエスペラントから英訳してアメリカ各地の新聞社、平和団体などにバラまいた。ベトナム平和エスペラントセンターは今度はその英文をコピーして、日本各地の英語教師の間にバラまいた。エスペランチストではない良心的な英語教師は、これをテキストにして、自分の生徒たちに英語を通じて平和の貴さを教えた。小西岳は、由比が手をつけていない未完成のまま放棄せねばならなかった本多勝一の『戦場の村』をエスペラントに抄訳し、このエスペラント訳からのユーゴスラビア語訳が新聞に出て、著者の本多をその早さでおどろかせたことがあった。

中国の運動と手を結んで……

すでに日本エスペラント協会は、一九五〇年五月に創刊された *El Popola Ĉinio* (エスペラント版『人民中国』) をこの国にひろめるために取次をしていた。創刊当時のこの雑誌は必ずしも今のような『人民中国』の翻訳ばかりではなく、もう少し幅の広いものであった。協会解散のあとを受け、英語

版『人民中国』取次者が検挙された中でも、この雑誌の取次は関西連盟で秘密に行なわれていた。一九五三年十二月、エスペラントを否認するスターリンの論文「言語学について」のあおりで休刊するまで、それは続いていた。日本語版の出ていない時代として、多くの文章がこの雑誌から翻訳されて、大小の左翼ジャーナリズムに供給された。

一九五七年、おそらく中ソ対立のはじまりを意識において再刊されたこの雑誌からの連絡を中ににおいて、坂井松太郎らの尽力で極東書店が創立されて、中国の書籍雑誌が大々的にこの国へ流れこむことになった。

エスペラントの仕事そのものについては、協会解散後、中国との連携の復活に努めたのは、栗栖継、のちには関西連盟であった。そしてやがて東京や九州へもこの動きが広がっていった。日本大会が行なわれるごとに、中華全国世界語者協会への呼びかけがなされた。これに応じた中国代表が香港まで来て、日本政府の拒否にあったのはたしか二回だと思う。

この間に奇妙な事件も起こった。日本共産党が一九六四年八月に、ソ連共産党と世間的なコトバで言うところ「仲たがい」したときのことである。日共中央委員会はソ共中央委員会あての返事を公開して、ソ共中央委員の大国主義的干渉に抗議した。この返事のエスペラント訳を発行したが、北京の外文出版社であった。⁽²²⁾ 翻訳にあたったのは坂井・中垣・大島であったが、このエスペラント訳の出版が年を越し、各国へその見本が送られた段階で、当の日共中央委員会が今度は中共中央委員会と正面衝突をしたのである。そして、そのあとは焼き捨てられでもしたのであろうか、この本は「品切れ」とあって注文にに応じてこなくなってしまう。訳者たちも一、二部もらっただけで——ただし印税か原稿料

は確実に入手した——そのままになってしまったと言う。したがって、この本はいまでは稀覯本に属することになる。宮本の所蔵本も外国で見つけたものである。

一九六五年の夏、東京で開かれた世界大会への中国代表出席も流されてしまった。そしてついにそれが実現したのは、大本教系の亀岡エスペラント会に関西連盟が協力して開催した一九七三年の第六〇回日本エスペラント大会であった。満場の拍手の中に中国エスペラントを代表して葉籟士(ジェレン)があいさつをした。下放運動で、文字改革委員会や中華世界語者協会の仕事からおろされてきたのが、この日本大会へ派遣のため復活(?)したもようであった。

そして一九七四年二月の末、日中文化交流協会からエスペラント八名の中国招請が伝えられてきた。問田直幹・伊藤栄蔵・徳田六郎らは四月十五日、訪中の途についた。

この以前にも、他の文化使節団に混じって、土岐善麿・高杉一郎・貫名美隆・江口廉・徳田六郎・坂井松太郎らがこの国のエスペラントを何回か訪ねているのだが、今度の訪中団は、いわばエスペラントだけのものである。それだけに期待が大きいわけであるが……。

戦後の各政党とエスペラントの関係についても一言しなくてはならない。

まず日本共産党。この党とエスペラントの関係はもともと深く、また瀬長亀次郎・米原いたる・多田留治・樋口幸吉・米村健・小松七郎らの多くのエスペラントを党幹部に持っているのだが、さてよく考えてみると、この党にはエスペラントに対する政策が欠けている。それは毛沢東の言うように「革命に役だつならば」という実用主義だけのように見える。ベトナム救援の運動をやっているか



第60回日本エスペラント大会であいさつする中国代表葉籟士氏(1973年)

らケッコウだ、というたぐいの見解しか見られない。エスペラントはヨーロッパ語の一種だから云々……というの、古くは佐野学、戦後では志賀義雄によって表明され、一九七三年の末ごろの『赤旗』にもくりかえされていたが、国家の死滅、民族の問題という大前提をヌキにして言語の問題を考えているもようである。これはいかにも困ったことである。

日本社会党の左派が一時期作っていた労働者農民党は、小野俊一らの提唱によりエスペラントの学校導入を綱領にしていたが、左右合同後の日本社会党の教育方針にもこれがある。山中吾郎や田原春次が何回か衆議院文教委員会などで、エスペラントを学校教育に導入することについて、政府委員の「考え」を「質問」している。しかし残念ながら、それまでであって、社会党、ないし社会党員がエスペラントを人民の間に普及する活動をした事実はほとんどない。党としてまず卒先して普及活動をはじめずして、一夜明けたら政府がやってくれ

るだろう、やらせねばならない、というのでは、しょせん夢の夢にすぎない。われわれ人民がたよるべきものは人民の力だけである。同じように猛省を求めたい。
公明・民社・自民の各党について語るべきものは何もない。

今後の課題——アジア・アフリカへの視点

そもそも国際語、または国際補助語とは何であるのか。ある天気晴朗の朝、各国の権力者たちがこつ然と自覚して、その世界的規模での採用を、たとえば国連の総会で決議すれば、ただちに実現するというタグイのものではない。コトバの問題は、民族と民族、国民と国民、さらに開発途上国で言えば、種族と種族というような複雑なものを、その底に持っているのである。

この見地に立つて宮本は「エスペラントは今のところ『民際語』とでも言うべきものではないか」という考えを発表した。⁽²³⁾裏がえしに言えば、エスペラントの発展を、政府、国際機構などのありもせぬ「善意」に期待するのではなく、また、エスペラントを学校教育に導入せよ、などと政府当局に「質問」や「請願」をしたり、国連大学にエスペラントをなどと実力不相応の呼びかけをして、世間の冷笑を招くべきではなく、第一に、何よりも第一に、人民の間に普及することに全力を注ぐべきだ、というのである。代議士にたよるよりも労働組合員大衆にまず広げるべきだ、というのである。念のために言えば、このことはオエラがたたちに対するいっさいの働きかけが無駄だということではな

い。反対に、こうした働きかけが人民の間に起こすであろう反響を十分考えることなくして行なわれてはムダだというのである。この考えはエスペラントの一部に一定の波紋を起こして、われわれの運動のあるべき姿について再検討を試みようという気運がぎざしかけている。⁽²³⁾

考えてみれば、戦後再出発した反体制的エスペラント運動も、革新諸勢力の七花八裂の現象のあおりを受けたせいもあり、何らかのテコ入れを必要としているようだ。確実なことを言えば、とくに日本エスペラント学会創立以来、あまりにもヨーロッパ・アメリカに向けられていたわれわれの目を、今やアジアに、さらにアフリカ諸国、ラテンアメリカ諸国に注がねばならぬということだ。

注

- 1 小松清「アンケートへの答」La Revue Orienta 一九五三年五月号。
- 2 最近、日本共産党はその文化政策に相当深刻な自己批判を行なっている。「戦後の文化政策をめぐる党指導上の問題点について」『前衛』一九七四年二月号。
- 3 R・スウェアリンゲン、P・ランガー共著、吉田東祐訳『日本の赤い旗』一九五三年 コスモポリタン社。
- 4 第三十二回日本エスペラント大会議事録 La Revue Orienta 一九四六年一、二、三月合併号。
- 5 北ざとり「京都人文学園とエスペラント」La Movado 一九六九年十月～十一月号。
- 6 「原爆の子」の経験をかえりみて La Movado 一九五二年七月号。
- 7 関西エスペラント連盟編「エスペラント訳『原爆の子』の反響」『図書』一九五三年六月号 岩波書店。のち、長田新編『原爆の子にこたえて』一九五三年 牧書店版に収録。
- 8 栗栖継『同じ太陽が世界を照らしている』一九四九年 北大路書房。同『世界の声』同年 三一書房。
- 9 アイ・ドゥック・アイ著、岡一太・星田淳共訳『トー・ハウ』一九六五年 新日本出版社。井出於菟ほか訳、ベトナム小説集『炎のなかで』一九六六年 東邦出版社。この一部は、丸山静雄編『ベトナム戦争』一九七二年 平凡社版に収録。グエン・コンホワン著、井出於菟・栗田公明共訳『袋小路』一九六七年 柏書房。フー・マイ著、栗田公明訳『最後の高

- 地——小説『エスペランツォ』一九六八年 東邦出版社。
- 10 Honda Katuit: *Vilagoj en Barakampo* (『戦場の村』) 一九七〇年 日本エスペラント図書刊行会。
- 11 『朝日新聞』一九六七年十一月十二日。
- 12 由比忠之進、宮本正男訳「ジョンソン大統領への抗議文」『世界』一九六八年一月号 岩波書店。のち鶴見俊輔編『平和の思想』一九七〇年 筑摩書房版に収録。
- 13 蔵園正枝「由比忠之進の生涯」『思想の科学』一九七〇年十月号 同社、および、同「わが父由比忠之進」*La Movado* 一九六九年十一月号。
- 14 田中貞美「満州エスペラント運動史 三」*La Movado* 一九六九年四月号。
- 15 室謙二「由比忠之進」高橋和巳編『明日への葬列』一九七〇年 合同出版。これは『思想の科学』にまず発表されたと記憶する。
- 16 蔵園正枝「わが父由比忠之進」。
- 17 前田俊彦「由比さんの五周年におもっ」*La Movado* 一九七二年十一月号。
- 18 アリス・ハース著、芝田進午編訳「ある平和主義者の思想」一九六九年 岩波書店。同『われ炎となりて』一九六六年 弘文堂。同増補版 一九六八年 文理書院。
- 19 福田正男訳「由比忠之進さんの日記」『週刊朝日』一九六七年十二月一日号。
- 20 『週刊朝日』一九六七年十一月二十四日号。
- 21 『朝日ジャーナル』一九六七年十一月二十六日号。
- 22 *Respondaj leteroj de la centra komitato de la Japana Komunista Partio al la centra komitato de la Komunista Partio de Sovetunio* (『日本共産党中央委員会とソ連共産党中央委員会への返書』) 1965, *Fremdlingva Eldonejo, Pekino*。
- 23 宮本正男「エスペラントは民衆語でなくか?」*La Movado* 一九七三年一月号。Miyanoto Masao: *Ĉu esperanto estas vere internacia lingvo?* (『エスペラントは本当に国際語だろうか?』) *Omni-buso N^o 5*, 1973. 奈良広志「柳田国男とエスペラント」『柳田国男研究』第四号 一九七四年一月。栗栖継「世界語・国際語・エスペラント」『文芸』一九七三年十月号。藤本達生「『民衆語』の民とは何か?」*La Movado* 一九七四年五月号。

参考文献——全体を通じて

- 藤間常太郎『日本国際語思想史』一九四〇年 大阪エスペラント文庫。
- 小坂狷二『日本エスペラント運動史料 一』一九五六年 日本エスペラント運動五〇周年記念行事委員会。同『日本エスペラント運動年表』一九五八年 第四回日本エスペラント大会準備委員会。
- L. Kokény, V. Bleier: *Enciklopedio de Esperanto* (『エスペラント百科事典』) 1934—35. *Literatura Mondo, Budapest*。
- Miyamoto Masao: *Historio de La Japana Esperanto-Movado* (『日本エスペラント運動史』) 1969. *L'Omni-buso, Kioto*。
- 武藤丸楠編『伊井迂氏談論集 日本エスペラント学事始』一九三二年 鉄塔書院。
- 宮本正男・朝比賀昇『日本エスペラント文献目録』(一九〇六—一九四五) 一九七〇年 日本エスペラント図書刊行会。
- 朝比賀昇・峰芳隆『日本エスペラント文献目録』(一九四六—一九七二) 一九七三年 エスペラント普及会。

直接関係を持たぬが参考になったものとして

- 平野謙・蔵原惟人・小田切秀雄・野間宏・竹内好『プロレタリア文学大系』一九五五年 三二書房。
- 荒正人・本多秋五・平野謙・佐々木基一『日本プロレタリア文学運動史』一九五五年 三二書房。